
家族の日常6 ゆずしゃーべっと

nano

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族の日常6 ゆずしゃーべつと

【コード】

N1216U

【作者名】

nano

【あらすじ】

とある家族の日常を次男の視点で語る。

母と編

風呂からあがり冷蔵庫を覗いていると母さんが帰ってきた。

「ただいまー」

「あ、お帰り」

「潤也は？ もう寝た？」

風呂上りはやっぱり牛乳だと思い、それをグラスに注ぐ。

「俺の部屋で寝てるよ、今日は運動会の練習で疲れたんだって」

「そっか、他は？」

「父さんはまだ仕事だつて、兄ちゃんはバイト」

母さんはダイニングのイスによっこらせっと座った。

2

「お土産あるの、一緒に食べない？」

「何？」

「ゆずシャーベット」

遠慮なく頂くことにした。

「潤也、最近また小学校休むこと増えた気がしない？」

二人でシャクシャクとシャーベットを食す。

「そっかな」

「前ほどじゃないんだけど、やっぱり一人になったからかしら」

少し前までは、俺も同じ小学校に通っていた。

俺が中学に上がったから、今三年生の弟は一人で通っている。

転校で一年半くらいしかいなかった小学校だったが、それなりに楽しかった。

その俺が転校する前、入学したての弟は学校に行っていなかったよ
うだ。

「保育園にも幼稚園にも行けなかったから、やっぱりかと思っただけ
ど」

シングルマザーの母さんが子どもを養うために仕事は休めない。

それでも職場の理解があり何度が仕事場に連れて行こうとしたが、
それも弟は嫌がったらしい。

必然的に弟は家に籠もった。

「やっぱり施設に預けたのがダメだったのかな」

母さんはもとの夫と離婚した直後から約二年間今俺の兄と弟になっ
ている二人を施設に入れたそうだ。

そういう話を俺は再婚前に母さんに聞いた。

酷いDVの末の離婚で、金銭的にも緊迫した状態でどうしようもな
かったと、その話をしている時母さんは泣いていた。

しっかり自立できた二年後、三人での生活を始めたがなかなか上手
くはいかなかった。

そのころ父さんと仲良くなり出したらしい。

状況がよく似ていたからなと父さんは言った。

ママが亡くなった直後、父さん曰く、仕事に逃げたらしい。

その間俺はお祖母ちゃんに育ってもらった。

約二年間。

そしてそのお祖母ちゃんも亡くなって、父さんは俺と二人っきりに

なった。

父さんと母さんが仲良くなるきっかけは俺だったと教えられた。俺は学校が終わったり、休みになると父さんが仕事場に連れて行ってくれた。

そこはウエディング会場。

父さんは仕事であちこち打ち合わせだ本番だとかでいないが、俺は事務所で遊んでいた。

そうして俺を連れてきている父さんをみて母さんは興味を持った。そうして今がある。

「潤也また学校いかなかったらどうしようかしら」

「大丈夫だと思う、これもう一個食べていい？」

「どうぞ、でもそれで最後ね」

「うん」

もう一個に手を伸ばして食べ始めると母さんはクスクス笑い出した。

「なに？」

「初めてみんなで会ったときのこと思い出した」

あの時は高級焼肉屋だった。

「あそこ、また行きたいなー。美味しかった」

「そうね、唯生さんに言ってみましょって、そうじゃなくて」

「あの時、大丈夫だなんて思えたのよ」

「大丈夫って何が？」

「ちゃんと家族になれるなって、そう思ったの」

あの時は父さんも母さんもすごく緊張していた。

初めて会った弟も兄ちゃんも何考えてるかさっぱりだった。

「あの時最後に何て言ったか覚えてる？」

「俺？」

「そう」

なんて言っただけ。

「うーん、覚えてない」

「ああ、美味しかったって言ったの」

なんだそれ。

「それだけ？」

「ゆずシャーベットでしめるのは最高だとも言ったわね」

俺そんなこと言っただけ。

「覚えてない」

母さんはまだクスクス笑っている。

「アレ聞いて大丈夫だなんて思えたのよね、私の役に立たなかった女の勘も捨てたもんじゃないってね」
よく分からない。

「ただいまー、疲れた」

「あ、お帰り」

「お帰りのさい、唯生さん」

「何の話してたんだ？」

「ひ・み・つ」

「「え？」」

父さんも、そして俺もびっくりだ。秘密にするほどの話なんかしてない。

「潤也も大丈夫よねー」

そう言っただけ笑ったまま母さんは風呂に消えていった。

「なんだ、おい、何の話してたんだ！」

「ごめん、俺にもよくわかんない」

我が家唯一の女性の感覚を説明できる人間はこの家にはいないだろう。もしかしたら兄ちゃんには分かっていたりして。今度聞いてみようかな。

女の人は謎が多い生き物だ

(後書き)

家族の概要がわかればいいな—とっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1216u/>

家族の日常6 ゆずしゃーべっと

2011年10月9日08時50分発行